

自己効力感を高める簿記教育の提案

—環太平洋大学における「簿記演習」の取り組みと実証研究—

金川一夫 手嶋竜二

I はじめに

本研究の目的は、自己効力感を高めるような簿記の教授法を提案し、この方法を環太平洋大学経営学部の授業「簿記演習」において実施して、学修者へのアンケート調査によりこの方法の効果を検証することである。統計処理はフリードマン検定を用いる。

II 提案する教授法の論拠

具体的かつ実行可能な、そして効果的な簿記の教授法を提案するにあたって、以下の心理学の研究成果を論拠にしている。

1. 学修性無力感

やる気のなさや無気力という状態は学修性無力感 (Learned Helplessness : 以下、LH という) と呼ばれている。LH は現状の不快な状況を過去の経験から将来においてもコントロールできないと予想したときに絶望的になり何も行動できない状態である。LH は決して生まれつきのものではなく、学修によって獲得されるものである。このように考えると、学修者も大学入学前に無力感や無気力を学修してくる可能性がある。もしそのような場合は、それらを解除すると同時に自分はできるのだという感覚 (後述する自己効力感) をもたせる必要がある。

2. 自己効力感

LH に陥るかどうかは、ある結果を自分の行為でコントロールすることができるかどうかにかかっている。「勉強すれば成績が上がる」というのは、勉強すること (行為) によって成績 (結果) をコントロールすることができる。しかし、コントロールすることができるにもかかわらず、「勉強する気にならない」 (やる気が起こらない) という事象を LH では説明できない。この部分の説明に貢献したのが Bandura の一連の研究である。

Bandura (1977) によれば、人が行動を起こせるのは、行動を起こすことによって成功できるという期待をもっているときである。期待は「勉強すれば成績が上がる」という結果期待 (outcome expectancies) と「1日に1時間勉強することができる」という効力期待 (efficacy beliefs) に区分される。すなわち、結果期待は、ある行動がある結果に至るといふ予期のことである。効力期待は、その結果に必要な行動を自らが実行できるという確信である (Bandura 1977, p.193)。

自己の能力への確信の程度、すなわち信頼感は自己効力感 (Self-efficacy) と呼ばれる。自己効力感が高いということは、困難な状況においても、それを乗り越える試練や挑戦すべきものと捉えることができる。自己効力感が低いということは、困難な状況を避けるようになり、自分には無理なのだと思ってしまうのである (伊藤 2012, p.254)。自己効力感とは、自分

がどの程度できるのかという効力期待に焦点を当てたものといえる。

本研究では、このように効力期待と結果期待を段階的に繰り返すことにより、自己効力感を高める事ができるとする考え方を論拠とする。これを「段階別学修の効果」と呼ぶことにする。

3. 授業における段階別学修の効果の測定

簿記の授業において、学修を段階的に行うことで、効力期待と結果期待が繰り返されることになる。これにより、自己効力感を高めることができると考えられる。そして、その効果を測定するために、学修者を対象にアンケートを実施し、その結果として得られたデータをもとに統計処理する。

III おわりに

本研究では、学修者の自己効力感を高めるような簿記の教授法を提案し、この方法にもとづいた授業を環太平洋大学経営学部の「簿記演習」で実施し、その効果をアンケート調査により検証した。

教授法は、習熟度別に階級を設けて、スモールステップによる成功体験を重視した段階別学修である。各階級では達成すべき課題を明示して、その課題を達成すればより上位の階級へステップ・アップすることができるようにしている。半期 15 コマを 4 ピリオドの期間に区分して、各ピリオドの終わりに小テストを行って、次期の階級を再編成している。学修者の成績は定期試験の結果により評価している。

この教授法の効果測定のためにアンケート調査を行っている。アンケートからのデータの相関を調べた結果、段階別学修によると自己に対して信頼感をもつという「自己効力感」を高めることが判明している。

さらに、段階別学修が効果的であるかについて検証するために、フリードマンの検定を行っている。結果として、階級を設けて、スモールステップによる成功体験を重視した段階別学修は効果的であるといえる。

参考文献 (一部)

Abramson, L.Y., Seligman, M.E.P. and Teasdale, I. (1978), "Learned Helplessness in Humans: Critique and Reformulation," *Journal of Abnormal Psychology*, 87, pp.49-74.

Bandura, A. (1977), "Self-efficacy: Toward a Unifying Theory of Behavioral Change," *Psychological Review*, 84(2), pp.191-215.